

学位論文審査の要旨

学位申請者	浦上 祐子 2020年3月単位修得退学		論文題目	ブリヤ＝サヴァラン『味覚の生理学』とイデオログの知の革命 ～新たな人類学としてのガストロミー～	
審査委員	主査:	田中 琢三 准教授	インターネット 公表	学位論文の全文公表の可否 :	否
	副査:	小松 祐子 教授		「否」の場合の理由	
	副査:	前田 佳一 准教授		<input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む	
	審査委員:	中野 裕考 准教授		<input type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある	
	審査委員:	村松 正隆 教授 (北海道大学)		<input checked="" type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている	
学位名称	博士 (人文科学)			<input type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている	
(英語名)	(Ph. D. in French Studies)			<input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている	
				※本学学位規則に基づく学位論文全文の インターネット公表について	

学位論文審査・内容の要旨

本論文は、ブリヤ＝サヴァランが1825年に刊行した『味覚の生理学』(Physiologie du goût) を取り上げて、一般に美食の書として知られる『味覚の生理学』が、その思想的・哲学的側面において、18世紀のビュフオンの博物学、コンディヤックの分析的方法論や感覚論、そして、それらを継承したフランス革命期の「イデオログ」と呼ばれる哲学者たちの思想をどのように受容しているのかを論じたものである。第1章では、ブリヤ＝サヴァランの造語であり性的感覚を表わす「ジェネジック」という語に注目し、その概念に影響を与えたビュフオンの著作と比較しながら、ブリヤ＝サヴァランが味覚と性的感覚をどのように結びつけているのかを検討し、第2章では、『味覚の生理学』に見られる進歩観を、ルソー、ヴォルテール、チュルゴ、コンドルセといった18世紀の思想家たちの進歩観と比較しながら、ブリヤ＝サヴァランにおいて味覚が人類の進歩とどのような関係にあるのかを考察し、第3章では、『味覚の生理学』における論の展開や構成において、コンディヤックが提唱した分析的方法論がどのように取り入れられているのかを明らかにし、第4章では、コンディヤックが論じた動物に対する人間の諸能力の卓越性をめぐる問題が、ブリヤ＝サヴァランにおいてどのように受容されているのかを検討し、第5章では、ブリヤ＝サヴァラン独自の人間学である「アントロポロミー」について、人間の身体と精神の関係を論じたカバニスやメーヌ・ド・ビランらイデオログの思想と比較し、とりわけ夢や睡眠に関する記述に焦点をあてながら考察している。そして、本論文の結論として、『味覚の生理学』は、ブリヤ＝サヴァランが、味覚という人類普遍の感覚に基礎をおきながら、18世紀の啓蒙思想、そして革命期のイデオログの革新的な思想を発展的に応用して、人間に関するあらゆる知識を総合した「新たな人類学」と呼ぶべき学問の確立を目指した著作であることを主張している。

審査委員による審査は2回実施された。2023年5月17日に開催された第1回の審査委員会では、従来はもっぱら美食の言説として論じられていた『味覚の生理学』を、18世紀から革命期に至る思潮の中に位置づけて捉え直すことによって、この著作の知られざる側面に光をあて、思想史的な観点からブリヤ＝サヴァランの新しい読み方を提示していること、現在では研究されることが少ないイデオログの著作など数多くの文献を参照して論文に説得力を持たせていること、明快な文章で理路整然と議論を展開していることから、極めて独創的で水準の高い論文として高く評価された。他方で、誤字脱字が多いこと、『味覚の生理学』におけるコンディヤックの分析的方法論の適用に関する説明が十分ではないこと、フランス語の翻訳に間違いがあることなどが審査委員から指摘され、それらの修正が求められた。2023年7月14日に開催された第2回の審査委員会では、修正された論文を審査した結果、指摘された問題点が適切に修正され、さらに論旨を補強する加筆がなされていることから、審査委員全員が公開発表会に進んでもよいという意見で一致した。

公開発表会は、2023年8月25日に対面とオンラインの併用という形式で実施された。口頭発表ではパワーポイントで図表を多用しながら博士論文の内容を分かりやすく明快に報告し、その後に行われた質疑応答における受け答えも的確かつ説得力のあるものであった。公開発表後に実施された最終審査会では、従来はフランスの美食文化の文脈において論じられてきた『味覚の生理学』を、18世紀や革命期の哲学の受容という切り口によってフランスの思潮の中に位置づけ、ブリヤ＝サヴァランの味覚をめぐる言説の思想的な意義を明らかにしたという点において、本論文の新規性と独創性が高く評価され、申請者に博士(人文科学)(Ph. D. in French Studies)の学位を付与することが全員一致で認められた。